

1997年度研究会報告書

広報学への接近

広報学検討研究会中間報告書

1998年7月

日本広報学会：広報学検討研究会

はじめに

日本広報学会にとって、「広報学」をどう定義するかという問題は、その存立基盤にかかわる重要なテーマである。しかし、それはそう簡単な話ではない。「広報学」という言葉がこれまでなかったわけではないが、学としての議論（志向）はほとんどなかったと言っている。しかも、広報の定義すら論者によってさまざまだし、そろそろ「広報」という言葉を違った表現に変更したいというような議論さえ出ているのが現実である。1年や2年で結論が見出せるようなテーマではない。重要ではあるが、気の重いテーマである。

しかし、日々行われている膨大な「広報活動」の重要性を考えると、そこでの蓄積を何らかの形で客観化し、知の体系として構築する枠組みを作っておく価値は大いにある。それに日本広報学会としては、避けては通れないテーマでもある。正直なところ、だれかが取り組んでくれないかと思っていたが、テーマがテーマだけに残念ながら引き受け手が現れず、適任ではないことを重々自覚しつつも、研究会運営委員を預かる一人として無謀にも研究会を呼びかけることにした。そんなこともあって、研究会の命名も「広報学検討研究会」とやや腰の引けた姿勢になっている。

こんな重いテーマに時間を割くような奇特な人はいないのではないかと思ひながらの参加呼びかけだったが、予想に反して大勢の方が参加して下さり、20名のメンバーという大世帯研究会となった。しかも、15名は会社所属の実務家であり、大学関係者は4名という構成である（他に学会の山田事務局長にも参加していただいた）。

広報「学」というテーマにこれほど多くの実務家が参加するという事は、学会としては非常に喜ぶべきであり、それ自体が示唆することも多いが、こじんまりと活動し、「広報学の検討が始まる契機をつくれればいい」と思っていた私にとっては、戸惑いのほうが大きく、果たして研究会としてまとめていけるのかどうか最初から不安をもったスタートだった。

実際に当初予定していた私のプログラムは、第1回の集まりで無残にも葬りさらされてしまった。それにしても、初回からみんな勝手なことをいう集まりで、主査としてはいささか「ムッ」としたが、考えてみれば、それこそが理想的な研究会なのだろう。方針を変更して、1年目は情報や意識を共有することを中心に進めることになった。また意識や姿勢の違いを考え、「学の視点から広報学の枠組みを検討するAグループ」と「実務の視点から広報学の枠組みを検討するBグループ」という二つの部会を設置し、全体会議とあわせて3本建てでの運営とした。

こうして出発した研究会だったが、予定とはかなり違った展開になってしまった。実務の視点から取り組んだBグループについては、非常に活発な議論が展開されたが、テーマの広さもあって、議論が収斂するところには至らなかった。学の視点からのAグループは、当初、文献調査や大学講座のシラバス調査なども考えたが、実際には調査はほとんどできなかった。そんなわけで、初年度の到達点は、広報学検討の必要性の認識を高めるとともに検討の入口が少しだけ見えてきたことにとどまった。そして、研究会としては、もう1年継続し、「広報学仮説」の提案に挑戦することとなった。

この活動報告書は、初年度の活動に参加したメンバーの有志が、それぞれの「広報学への思い」を書いたものである。同時に、大学での広報関係講座の予備調査の結果報告も併載した。議論を整理しての報告書ではないが、参加者の思いを素直に出した「読み物」としてお受け止めいただきたい。そして、できるならば、異論同論を問わず、感想やアドバイスをいただければと思っている。

研究会のメンバーは次の通りである。

〔Aグループ〕

猪狩 誠也	東京経済大学コミュニケーション学部教授
上野 征洋	株式会社コミュニケーション科学研究所専務取締役
金澤 活	株式会社カフ アド ハウス 代表取締役
佐藤 修	株式会社コンセプトワークショップ代表
新海 貴弘	神奈川大学大学院経営学研究科博士過程
山田 達雄	日本広報学会事務局長
○山田 晴通	東京経済大学コミュニケーション学部助教授
○和田 仁	株式会社電通イノベーション・テクノロジー・センター 部長

〔Bグループ〕

植竹 政次	山九株式会社組織活性推進部担当マネージャー
○遠藤 彰郎	國学院大学経済学部助教授
大森みつえ	株式会社カイト国際部部長
大和田順子	株式会社イオンフォレストコミュニケーション部部長
○君島 邦雄	テルモ株式会社広報室副室長
小林 貞夫	愛知学院大学大学院経営学研究科教授
寺門 正之	株式会社東急エージェンシーPR部
中村 豊	東陶機器株式会社広報部部長
濱田 信夫	川鉄ライフ株式会社ビジネス・サービス部部長
平井 浩人	日本たばこ産業株式会社広報部次長
谷中健太郎	三井不動産販売株式会社広報室室長
山田 貞義	千代田化工建設株式会社広報部部長代理

*○は各グループのリーダー、所属は原則として当時の所属

広報学検討研究会主査
佐藤 修

目 次

第1部 広報学検討への視点

- 広報学検討に向けての視点とキーワード／小林貞夫 1
- 「広報学」検討にあたって／遠藤彰郎 4
- 広報学検討に対するアプローチ方法に関する一考察／新海貴弘 7
- 「関係」の科学への里程標／上野征洋 9
- 広報学を支える基礎科目についての一考察／和田仁 16

第2部 広報の現場から広報学を考える

- 広報学の確立への期待／君島邦雄 23
- 実感的広報学の周辺／谷中健太郎 28
- ステイクホルダーとの対話を通じて公益の増進をめざす／大和田順子 38
- 変革の時代の広報の性格を考える／中村豊 43
- これからのPR会社の役割／大森みつえ 49

第3部 調査報告

- 大学における広報関係講座の内容に関する予備調査結果／佐藤修 .. 52